

からかい上手の高木さ  
ん～Extra short  
stories～

山いもごはん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

更新は滞ってます！☆

からかい上手の高木さんと、からかわれ上手の西片君。

もしかしたらあつたかも知れない、なかつたかも知れない、そんな二人の日常の物語。

1. 筆者はなぜか書くごとに作品が長くなつていくので、がんばって原作と同じくらいの分量の作品を書きたいと思いつた次第です。ショートと銘打っているのは、目標としてショートにしたい、というくらいのものです。

2. なるべく設定を変えないように、キャラクターに変な味をつけないようにと気を

つけていますが、筆者の力不足ゆえにどうしても追いつかない部分があります。ご容赦を。

さらに、新刊が出るたびに原作に設定が追加されていくので、整合性がとれていない部分も多々あります。この辺りも、温かい目で見ただければ幸いです。

3. 設定は基本的にコミックス版に準拠していますが、一部アニメ版を取り入れたコンパチ仕様となっております。

4. よろしければこちらもどうぞ。ただし、1で書いたように一作一作が長いです。

<https://syosetu.org/novel/155413/>

# 目次

ハンドクリーム	1
卒業アルバム	5
好み	10
鏡	17
ロシアンルーレット	25

# ハンドクリーム

「たっ！」

冷たい風の吹く帰り道、オレは通学カバンを持つ手に痛みを感じた。見れば、指の関節に見事なあかぎれができている。

「うわあ……痛そうだね……」

隣で自転車を押す高木さんもオレの指を見て、率直な感想を漏らす。

「私、絆創膏持つてるからあげるよ。」

高木さんは自転車を止め、カバンから絆創膏を取り出す。

「はい。じゃあ、貼ってあげるから手出して。」

「え？い……いいよ！それくらい自分でできるから！」

「そうかな？西片不器用でしょ？」

「余計なお世話だよ！」

確かに不器用なのは自覚している。だけど、他人から言われるとそれはそれであまりいい気はしない。

絆創膏をもらい、この上ないほど丁寧に貼る。

「ほらね？」

そう言ったのは高木さんだった。案の定、片手で絆創膏を貼れるほどオレは器用ではなかった。

「あはははっ！だから言ったのに。」

「くっ……。」

「そうだ、他のところも切れる前に、ハンドクリーム塗っておくといいよ。私、持つてるから貸してあげるよ。少し切れてるところに塗ってもあんまりかゆくならないタイプだから、今の西片にはちょうどいいと思うよ。」

高木さんはカバンからハンドクリームのチューブを取り出し、自分の手にゆるにゆると出す。

「はい。じゃあ、塗ってあげるから手出して。」

「はあっ!?塗るって、その、それで？」

「うん。私が、私の手で西片の手に塗ってあげるの。」

「そんなのできるわけないだろ!?!いいよ!自分で塗るよ!不器用でもそれぐらいはできるよー!」

「あはははははっ!もう…顔真っ赤にしちゃって……一生懸命弁解して……あはははははっ!」

高木さんは、自分の手に出したハンドクリームを大笑いしながら自分の手に塗り、続いてオレの手にハンドクリームをにゆるにゆるっと出してくれた。

初めて塗るハンドクリーム。高木さんと同じように両手にしっかりと塗りこむと、それだけでもうすべすべになったような気がする。

「ねえ、西片。」

「今度は何?!」

「こうして同じハンドクリーム使つてるとき、なんだか手つないだような感じがしない?」

「はあっ?!何言つてんの?!しないよ!全然!するわけないよ!」

もちろん、ハンドクリームはハンドクリーム。手をつなぐこととはまったく別だ。同じはずがない。

だけど、そんなことを言われたせいで、自分の両手を妙に意識してしまった。

幸運だったのは、その場所がまさに、帰り道で高木さんと別れる場所だったこと。

オレにできることは、その場から逃げ去ることだけだった。

「じゃ、じゃあ!オレ帰るから!また明日!」

高木さんに別れを告げ、オレは高木さんの姿が見えなくなる場所まで走った。

少しの間ダッシュしたオレは、道端で少し息を整えることにした。

指に貼られた絆創膏と、ハンドクリームの感触に意識が向く。  
ふと思いついて手のおいをかぐと、少し甘い香りがした。



## 卒業アルバム

「それ何？」

昼休みの終わり、オレは右隣の席に座っている高木さんに尋ねる。

「卒業アルバム。今、女子の間で見せ合うのが流行ってるんだよ。」

オレと高木さんは学区が違う。だけど、そのケースには見覚えがある。オレの卒業アルバムと同じ大きさで、同じ模様のケースだ。中のアルバム自体もきつと似たような模様なんだろう。学区の近い小学校では、きつと同じ業者に卒業アルバムの作製を依頼しているのだろう。

「見せ合うだけ？」

「うん、見せ合うだけ。」

「それって楽しいの？」

「結構楽しいよ。なんなら私の見せてあげるよ。」

見せてあげるって言われても……別に興味もないしな……。

そう思いながらもペラペラとページをめくっていると、修学旅行なんかの行事の写真が載っているページが現れた。その中の一枚に、オレの知らない女子3人と楽しそうに

カメラに向かってしている高木さんの写真があった。他の生徒はほとんどが引きで撮られている中、こうしてカメラ目線で写っている写真は珍しい。

「高木さんだ。」

「うん。その3人は仲良しだったんだけど、中学校に上がってからは一緒に遊んだりする機会がすっかりなくなっちゃってね。メールとかではちよくちよく話してるんだけど。」

正直なところ、この4人の中では高木さんが一番かわいらしい。だけどそんなことは言わない。言う義理も義務もない。

ただ、一緒に写っているのがオレの知らない女子だったからか、ふと、ここに写っている高木さんは、オレの知らない高木さんなのだ、妙なことを考えてしまった。

他にも気にして探してみると、後ろ姿だったり見切れていたりするものの、ちらほらと高木さんの姿が見つかる。

せっかくなので、個人写真も見てみよう。普通の卒業アルバムなら、各生徒のバスタップの写真が、クラスごとのページにまとめてあるはずだ。

高木さんって何組だったの？と尋ねようと顔を上げると、高木さんと目が合った。

「な……なんでこっち見てるの?」

「ん?西片が私のこと一生懸命探してくれてるのが嬉しいなって。」

「なあっ!？」

「あれ? 違うの? 一生懸命探してくれてたよね?」

「別に一生懸命になんて探してないし! 全然そんなんじゃないし!」

「一生懸命じゃないにしても普通に探してくれてたよね?」

「だから別に探してないって! そんなことしてないから!」

「ふーん。まあ、別にいいけど。」

なんだか全部見透かされているような気がする。いつものように。

実際、探していたのはほんとのことだったんだけど、あんな言い方されてしまったては、はいそうです、と認めるわけにはいかない。なにより恥ずかしすぎる。

恥ずかしさをごまかすように、オレは少し話題を変えることにした。

「た……高木さんさ、あんまり変わらないよね。」

オレの言葉に、高木さんがじとつとした視線を送ってくる。

「西片、それってセクハラだよ。」

「なっ……! ちがつ……! そういうつもりじゃなくて!」

「そういうつもりって?」

「だから……その……そういうつもりじゃなくて……。」

「ぶっ……あはははっ! 西片、さつきから同じことばかり言ってるよ。必死なんだから、

もう。あー、涙出ちゃうや。ぷぷぷつ…。」

ここにきてオレは、からかわれたことに気付き、照れ隠しにまた卒業アルバムをペラペラとめくり始めた。

「まあ、6年生のときの写真ばかりだから、実際にあんまり変わってないんだけどね。」  
「だったらなんでさつきセクハラとか言ったのさ!」

「だって、これで西片をからかえるって思ったたら、我慢できなくなっちゃって。」

「あー、そうですか……。」

5時間目の授業の前にとつと疲れてしまった。

「あ、でも、1つだけ、この頃の私と、今の私とで、全然違うことがあるんだよ。」

「ああ、そうなんだ……。何が?」

尋ねてもろくなことにはならないだろうと思っただけど、なんとなく惰性で尋ねてしまった。

「今の私は、西片と出会ってるから。」

「なっ!」

つまり、それって……!?と、驚いたものの……一体どういうこと?

高木さんに尋ねようとしたとき、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。まあ、これ以上引き延ばすような話題でもないだろう。

それに、なんとなく、なんとなくだけど、この話題にはこれ以上触れない方がいいよ  
うな気がする。

「西片。」

オレが授業の準備をしていると、高木さんがオレの目を真っ直ぐに見ながら言った。  
「今度、西片のアルバムも見せてね。」

オレには、卒業アルバムをネタにからかわれる未来が見えていた。

## 好み

「西片つてき、どんな女の子が好みなの？」

少し涼しくなり始めた季節。その質問は、高木さんとの下校中、唐突に彼女から投げかけられた。

「はあっ?!なんでいきなりそんなこと聞くのさ?!」

「だから、どんな女の子が好みなの? って。」

「そういうことじゃなくて!なんでそんなこと聞くの?!」

高木さんは顎に人差し指の指先を当て、空を見上げる。

「うーん。」

そして、一秒ほどの後にオレを振り向いて言った。

「なんとなく?」

「『なんとなく』?!なんとなくでそんなこと聞くの?!」

「まあまあ。だって、同級生の男の子が、どんな女の子が好きなのか、なんとなく知りたくない?」

実際のところ、好みのタイプなんて考えたことがない。だけど、それを正直に言うと、

高木さんにはからかわれるに違いない。

オレは、普段の復讐も兼ね、あえて高木さんの逆のタイプを答えることにした。

「まあ……別に隠すようなことでもないからいいけど。まずは、オレのことをからかってこない人かな。」

「からかってこない人。」

「それで、髪はショートで。」

「ショートで。」

「背が低めで。」

「低めで。」

「そんなところかな……。」

「からかわなくて、髪がショートで、背が低めの子？」

「そう……なる……かな……。」

高木さんの逆のタイプを言おうとしたのに、出てきた特徴がたったの3つ。オレ、意外と高木さんのこと、知らないんだな……。

「ふーん。」

高木さんは一瞬納得したかのように見えたが、次の瞬間、オレの目を見つめて言った。「西片って、私の真逆のタイプが好きなんだね。まるで、わざと逆を言ったみたい。」

この言い方。完全に見透かされている。ふと思いついた程度で高木さんに復讐などできるわけがなかったのだ。

オレが高木さんの視線から逃れるように顔を背けると、彼女は猛烈な反撃をした。

「胸は？ 大きいのと小さいの、どっちが好きなの？」

「ぶっ！」

突然何を言い出すのか。オレは一瞬にしてパニックに陥った。

「む……胸、とか……いきなり何言い出すのさ！」

「だって、男の人って女の子の胸ばっか見るって言うでしょ？ 私の逆が好みだったら、胸も私の逆の方がいいのかなって。」

確かに、高木さんの胸は小さい。それは、オレと高木さんの間での共通認識でもある。つまり、オレが小さいのが好きだと言えば、高木さんの胸は大きいと言っているのと同義だし、大きいのが好きだと言えば、高木さんの胸は小さいと言っているのはまた同義なのだ。

ともあれ、大きいとか小さいとか、オレの口からはつきり言えるはずもない。恥ずかしくないのだ。

だから、いつものようにごまかすしかない。





「こつちのセリフだからね!」

正直うらやましい。オレもこんな風に自由に生きてみたい。

「じゃあ、高木さんはどんな人がタイプなんだよ。」

「ほらね?」

「ん?」

「気になるでしょ? 『なんとなく。』」

「違うよ! 別に気になったわけじゃなくて! オレだけ話して高木さんが話してないのは不公平だから!」

「西片は話したっけ?」

「えっ?」

話してない。高木さんの逆を言ってお茶を濁したただけだ。そしてそれは高木さんにもバレている。

「まあ、別にいいけどね。それで、西片は私の好み知りたいたいんだ?」

『知りたい』というのは悔しい。だけど、その情報が、今後高木さんをからかう上で役に立つかも知れない。そう、情報を制するものが世界を制するのだ。

「いや、基本的にはどつちでもいいんだよ? でも、知りたいか知りたくないかで言ったら、まあ、知っててもいいかなってくらいで。6:4ぐらいで知りたいかなってくらい

で。」

「それって、要するに知りたいうことでしょ？」

「う……まあ、そうなるかな……。」

オレは反論することを諦めた。

「私はね、一緒にいて飽きない人がいいかな。」

「そうなの？」

「うん。やっぱり、ずっと一緒にいられるのって大事なことじゃない？」

「そうなんだけど……少し意外だったから。高木さんのことだから、からかって楽しい人、とか言うのかと思ってた。」

オレがそう言うと、高木さんはきよとんとした目でオレを見て言った。

「からかって楽しい人って、それ、西片本人のことじゃないの？」

「なっ！」

この展開は……マズい。

「ふーん。そっか。私は西片のことが好きだったんだ。ふーん。」

「違う！だから違う！言葉のアヤだから！そういうつもりで言ったんじゃないから！」

オレが全力の否定をするのは、これで今日何日目だろう。

「何が違うの？」



一緒に帰ろう、と高木さんに誘われたので、一緒に帰ることにした。

昇降口に向かう途中の廊下で、高木さんが体操着を忘れたことに気付いた。

『アーツハツハツハ！教室に忘れ物なんてマヌケだねえ高木さん！』と言ったら、『そうですね。取ってくるから先に行つてよ。』と軽くいなされた。

なんとなく悔しい思いをしながら、オレは一人昇降口に着いた。

高木さんをボーッと待ちながら、ウロウロキョロキョロしていたところ、昇降口の角に設置されている『それ』を見つけた。

『それ』は、高さ2メートル、幅2メートルほどの、クローゼットのようなものだった。観音開きになっているようで、正面には取っ手が二つついている。引けば簡単に開けられそうだった。

ただ待つているのも暇だし……。そう思い、オレはそのクローゼットに近づいていった。

「お待たせ、西片。」

「あ……おかえり、高木さん。」

「うん。ただいま、西片。」

何が『おかえり』で何が『ただいま』なのかはわからないけど、会話は成立していた。

「高木さん、あそこにあんなクローゼットみたいなのってあったっけ？」

「うん。私たちが入学した時からあったよ。今まで気付かなかったの？」

気付かなかった。だけど、気付かなかったと言うのは悔しかった。

「ああ、そういえばあったね。今の今まで忘れてたけど、確かにあったよね。」

「でしょ？だから、中に何が入ってるのか、西片は当然知ってるよね？」

藪をつついて蛇を出す。きつと、こういう状況のことを言ったことわざなんだろう。

「あ……ああ、もちろん知ってるよ。知ってるに決まってるだろ。」

「そうなんだ。実は私、ど忘れしちゃってさ。中に何が入ってたんだっけ？」

なっ……！

一瞬にして顔に汗が噴き出した。高木さんは、そんなオレの様子を見てニヤニヤしている。

「ほ……ほら、とりあえず開けようよ。口で説明するよりも開けてみた方がわかりやすいからさ。」

「私は西片の口から説明してほしいんだけどなー。」

「いいから！とにかく開けるの！」

高木さんから逃れるように、オレはクローゼットの前に立った。一体何が入っているのか……オレは少しドキドキしながら、取っ手に手をかけた。

「どかーん！」

「うわああ！」

言うまでもない。高木さんだ。

「あははははっ！びっくりした？」

「当たり前だよ！」

「あははは。西片、すごくビクビクしながら開けようとしてたから、ついからかいたくなっちゃって。」

「ビクビクしてないよ！あれは……ドキドキしてたんだよ！」

「まあまあ、どっちでもいいからさ。早く開けてよ。」

「誰のせいだよ……。開けるから、今度は脅かさないでよ。」

「はい。」

いい返事をした高木さんを、オレは信じることなく、彼女に全神経を集中しながら取っ手に手をかけた。こうなると、クローゼットに対するさっきのドキドキは、もはや完全に吹き飛んでしまっていた。

そして、ゆっくりと観音開きの扉を開ける。

扉の中にはオレがいて、その奥には高木さんがいた。

「鏡……？」

扉の中は、一面鏡張りの世界だった。オレは、唐突に現れたその光景に圧倒されていた。

しかしその数瞬の後、その世界に違和感を感じた。

その鏡の世界では、オレの姿が左右逆に映し出されていたのだった。

いや、オレだつてそこまでアホじゃない。

普通の鏡像が左右対称に映ることぐらい知っている。

そこには、普通の鏡像のさらに左右逆の姿が映し出されていたのだ。

オレが右手を挙げれば右手を挙げ、左手を挙げれば左手を挙げる。

一体どうなっているのか。

「リバーサルミラーっていうんだって。」

オレが鏡に向かってアホみたいに手足を動かしていると、高木さんが説明してくれた。

「鏡を2枚使つて2回反射させることで、鏡像のさらに鏡像が映るっていう仕組みらしいよ。」

鏡像のさらに鏡像。理屈はわかるが、目の前にある光景には、そんな理屈を吹き飛ば



すようなある種の神秘的な魅力があった。

「それはそうと、なんでこんなところにこんなものがあるの?」

「卒業生の寄贈だつて。こういうのが好きな人がいたのかな?」

確かに、こんな面白いモノがあれば他の人にも見せたくなるのが人情と言うものだろう。

「ね、知ってる?人の顔つて、左右対称じゃないんだつてさ。」

「ああ、なんか聞いたことあるかも。」

「だからね、西片が鏡で見てる西片の顔と、私が見てる西片の顔は、実は少し違うんだよ。」

高木さんは、オレの隣に並びながら言った。

「今西片が見てる顔が、いつも私が見てる西片の顔。どう思う?」

確かに、鏡に映る自分の顔には違和感がある。どちらかといういつもの方がかっこいい気がする。

だけど、そんなことを正直に言うのは、あまりにも恥ずかしすぎる。

「どうつて……別に普通だけど。」

「そつか。私は好きだけどな。」

「すっ!?!」

はあああ!?急に何言ってるんだこの人!?

「んー?どうかしたの?」

ニヤニヤしながらオレの顔を見てくる。

わかつている。いつものようにオレをからかっているだけだ。

だけど、ここで引いてはいつもと同じだ。

オレはあくまでもポーカーフェイスを貫く。

「じゃ……じゃあ逆にさ、高木さんが今見てる顔が、いつもオレが見てる顔だってことだよね。」

「ふーん。」

「こ……今度は何だよ?」

「西片、いつも私のこと見てくれてるんだ?」

なっ!?

「はあっ!?!何言ってるの!?!そんなこと全然言っていないじゃん!」

「えー、言ったよ?いつもオレが見てる顔、って。」

「言ったけど、そういう意味じゃなくて!」

「じゃあ、どういう意味?」

「だから!その!オレが毎日見てるっていう意味であってだね!」

「毎日見てくれてるんだ？」

「そういう意味じゃなくてね!？」

これ以上の話し合いは無意味だ。というよりも、オレがケガを重ねるだけだ。

「ほら、もう帰ろうよ。」

「西片! 鏡!」

「えっ!？」

『カシャツ』

帰ろうと鏡の前を離れようとしたオレを、高木さんが強い口調で呼び止めた。その勢いにオレは驚いて思わず鏡を見た。その瞬間、カシャツ、という音が聞こえた。

音のした方を見ると、高木さんがケータイの画面をオレに見せていた。

そこには、鏡を写した写真が表示されていた。つまり、猛烈に驚いた表情のオレと、平然とケータイを構えている高木さんの2ショット写真だ。

高木さんはその写真を見て、涙を流さんばかりに笑い始める。

「この表情……あははは! もう、ほんといい顔するよね。この真剣な顔……あはははははっ!」

「ちよつと! 写真なんて撮ってどうするのさ!」

「どうもしないよ? ただ持っておくだけ。あ、後で西片にも送るね。」

「いらないよ！」

「あははは。あー、おかしい。私にとっては、さっきの顔よりも、こっちの驚いてる顔の方が、西片の顔って感じがするや。」

## ロシアンルーレット

「あれ、珍しいね。」

オレ一人しかない教室に、高木さんの声が響く。

確かに、クラスの誰よりも早く登校するというのは、オレにとってはとても珍しいことだ。

例外があるとすれば、高木さんと一緒に登校するときぐらいだ。

「まあ、たまにはね。朝の空気が気持ちよくてさ。」

嘘をつきました。本当は、高木さんに勝負を挑むためにわざわざ早起してきたのだ。

「どうせ何か勝負でもしようって言うんでしょ?」

一瞬でバレた。

出鼻をくじかれた感じはするが、ともかく勝負だ。勝負に勝てばいいのだ。

「それで?今日はなんの勝負なの?」

「これさ。」

そうやって、オレは一丁の拳銃を取り出し、高木さんに渡す。六連装の回転式拳銃。

いわゆるリボルバーだ。

もちろん本物ではなく、ただのおもちやだ。しかし、実際におもちやの弾を装填して、大きな音を鳴らすことができる。

「もしかして、ロシアンルーレット?」

「その通り。」

その通り。今日の勝負はロシアンルーレットだ。

ロシアンルーレットは、リボルバーの引き金を交互に引いて、弾が出た（この銃の場合、大きな音が出た）ほうが負けになるという、極めてシンプルなルールのゲームだ。引き金を引くときは、なぜか額かこめかみに銃口を当てるのが通例となっている。緊迫感を出すためだろうか。

「ふーん。もしかして、実力じゃ勝てないから勝負を運に任せようとしてる?」

「う……うるさいな! そういうんじゃないから……!」

オレは一瞬熱くなるものの、すぐに冷静さを取り戻す。これは高木さんの挑発だ。そう簡単に乗ってたまるか。

「なるほど、運任せ、ね。まあそう言われればそうかもしれないね。」

「あれ、思ったよりも冷静だね。」

オレがロシアンルーレットを勝負に選んだのには理由がある。というのも、オレは昨

日気づいてしまったのだ。確かにロシアンルーレットは運任せのゲームと言っても過言ではない。しかし、一発目で当たり（はずれ？）を引いてしまったら、その時点で負けだということに。つまり、後攻が圧倒的に有利なのだ……！

オレのそんな思惑にも気づかず、高木さんはおもちゃの銃を右手でもてあそんでいる。

「それで、ルールはどうするの？」

「弾は一発。最初にシリンドラーを回したら、あとは弾が出るまで交互に引くっていうのは？」

「いいよ。順番はどうするの？じゃんけん？」

きたつ！ここで後攻をとらなくては作戦が破綻する。

オレはあくまでも平静を装いながら言った。

「れ……でい……レディーファーストで、いいんじゃないかな？」

平静を装いながらも、ちよつと囁んでしまった。

「ふうーん。」

ちよつと囁んだオレの顔を見ながら、高木さんは意味ありげに鼻を鳴らす。

「な……なに？」

「いやあ、私のこと、レディーとして扱ってくれるんだ、と思つてさ。」

「ちがつ！」

違う、と否定したいのに、焦りから言葉が途切れる。あわせて顔が熱くなってくる。

「あははっ！顔、真っ赤だよ？」

「言うと思ったよ……。」

もうお決まりのやり取りだ。

「あはははっ。あー、おかしい。」

「いつまで笑ってるんだよ……。もういいじゃないか……。」

いい加減に解放してほしい。

「あはははっ。ごめんごめん。ロシアンルーレットの順番決めるところだっけ？」

「そうだよ。高木さんが先攻でいいんじゃないかって話だよ。」

「レディーファーストでね。」

「それはもういいから！」

「はいはい。なんだか裏がありそうだけど、私が先攻でいいよ。」

オレは心の中でガッツポーズをとった。紆余曲折はあったものの、無事に後攻を取る  
ことができた。

高木さんに一発の弾を渡す。すると高木さんは妙に慣れた手つきで弾を込め、シリ  
ンダーを回した。



「じゃあ、いくね。」

そう言うと、高木さんはこめかみに銃口を当てた。

「あ、そうだ西片。知ってる？ ロシアンルーレットって、順番に有利不利はないんだよ。」

「えっ？」

カチカチッ！

オレの間抜けな声と、銃の乾いた音。それらはほぼ同時だった。

「えっ？」

そして再度、オレの間抜けな声。

「高木さん……今……二回……？」

「だって、一回しか引いちやいけないうってルールはなかったでしょ？」

「いやまあ、そうだけど……。」

間抜けにつぶやくオレ。さっきから間抜け尽くしだ。

「そういうえば、順番で有利不利はないって本当？」

もうこうなったら間抜けついでに聞いてやる。

「本当だよ。確率の問題。数学で習ったでしょ？」

「確率の問題……？」

確率の問題。確かに授業で習った。しかし、袋の中から玉を取り出すとかいうのは

習った覚えはあるけど、ロシアンルーレットは習った覚えがない。

オレがうなっていると、高木さんは言葉が続けた。

「では西片、問題です。今この状況では、私と西片、どっちが有利になったでしょう？」

成績学年10位の高木さんじゃあるまいし、いきなりそんなことを言われてもわかるわけがない。そもそもオレは確率の授業でロシアンルーレットを習ってないのだから。

いや、ここで気持ちが悪くはダメだ。運任せとはいえ、流れというものはある。そこで、オレはあえて強気に出てみた。

「もちろん、オレのほうが有利に決まってるよ。」

「今から西片の番なの？」

そうだ……オレがここで当たり（はずれ？）を引いてしまつては、そこで終わりだ。

ということはおレが不利……？ いやいや。そもそも、最初に高木さんが不利だと思つていたところ、有利不利はないと言われたわけだ。ということは……？

「ふっふっふ……わかつたよ高木さん。今この状況、オレと高木さんは、どちらも同じ確率だということがね！」

「おー。よくわかつたねー。」

「ふっ。冷静かつ論理的に考えればわかることさ。」

「すごいすごい。じゃあ、はい。西片の番だよ。」

「えっ?」

オレはまたしても間抜けな声を出した。そうだ……今は数学の授業中ではなく、ロシアンルーレットの勝負の真つ最中だった……。

勝負以外のことによそ見をしていた自分を恥じながら、高木さんから渡された銃を見つめる。

大丈夫だ……オレと高木さんは同じ確率なんだ……。

自分を鼓舞しながら、こめかみに銃口を当てる。

オレと高木さんは同じ確率なんだ……。だからこそ、気持ちで負けるわけにはいかない。

となると、オレのとる行動は決まっていた。

カチカチッ!

オレは、高木さんと同じように二度引き金を引いた。

「はーっ、はーっ。」

なんとか死地を脱したものの、もはや満身創痍なオレ。

「おー、すごいね西片。まさか二回引いてくるとは思わなかったよ。」

「ま……まあね。これぐらいのことはしないと高木さんには勝てないからね。」

空元気を振り絞って言う。空元気も元氣、虚勢も勢いだ。

「ふーん。その割には限界そうだったけど。」

「う……うるさいな！それよりほら、高木さんの番だよ！」

高木さんに銃を渡しながら言う。そして、今になって気づく。そして、そんなオレの気づきを高木さんが言葉にする。

「お互い二回ずつ、合わせて四回引いたから、残る弾倉は二つ。つまり……次で勝負が決まるってことだね。」

そう言う和高木さんはこめかみに銃を当て、一つ息を吐く。

二分の一の確率だ。これぐらいの確率の問題ならオレにでもわかる。

そして……。

カチンッ。

銃は乾いた音を立てた。

な—————っ！

「私の、勝ち。」

余裕のセリフを吐く高木さんの横で、オレは教室の床に崩れ落ちていた。

くそおお！なにが気持ちだよ！気持ちで勝てれば苦労はないよ！

「じゃあ、罰ゲームなにしてもらおうかな。あ、その前に……。」

高木さんは銃をオレに渡しながら、満面の笑みをたたえて言う。

「次、西片の番だよ。」

「えっ?」

「だから、西片の番。まだ引いてないでしょ?もしかしたら弾出ないかもしれないし。」

「そんなわけないだろ!」

「あれ?逃げるのかな?」

挑発なのはわかってはいたけれど、ここまで言われてやらなければ男がすたる。

「わかったよ……やるよ……。」

「そこなくっちゃ。」

オレは高木さんから銃を受け取り、銃口をこめかみに当てる。そして……。

「ばん!」

「わあっ!」

高木さんの大声に、オレも思わず大声を出してしまう。

「もう!そういうのやめてよ!」

「あはははっ!あはははははっ!」

オレの抗議にも関わらず、高木さんは笑い続けている。その目には涙まで浮かべている。

「あんなことされたら誰だってびっくりするに決まってるだろ!」

「だって……西片ってば……あははははっ！」

朝の空気は、どこまでも澄んでいて。

オレたち二人しかない教室に、いつまでも高木さんの笑い声が響いていた。